卒業論文概要書

人と観光を繋ぐ観光施設のデザイン

高知工科大学　システム工学群　建築・都市デザイン専攻
1250013　石橋一星
担当教員：重山　陽一郎

1.目的

高知県観光振興スポーツ部観光政策課の報告書によれば、高知県の県外観光客数は2003年以降に取り入れた推計手法において最多となる472万人に達している。これには高知県を題材とした映画や連続テレビ小説といった作品がここ数年で多く発表されたことが関係していると思われる。また、高知県には魅力的な景観も数多く存在しており、前述した作品をきっかけに高知へ足を運ぶことで、それら景観に触れることで、ますます観光客数は増えると考えられる。今回の設計ではそういった観光活動を支え、高知の魅力により多くの人が触れてもらえる拠点を構想する。

2.対象敷地

高知県高岡郡日高村大花1020

3.選定理由

(１)中継地点としての魅力

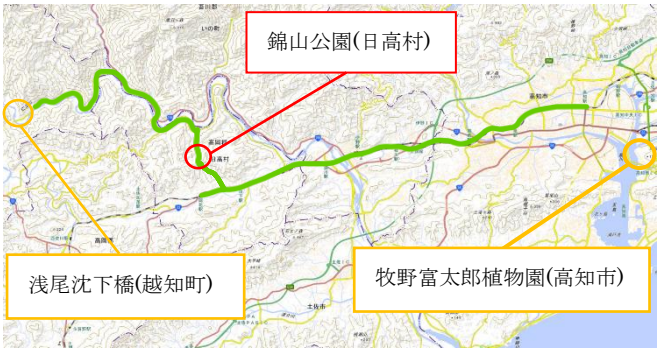

図１　日高村・錦山公園の位置

日高村は背景で挙げた作品のうち、「竜とそばかすの姫」の舞台である越知町と「らんまん」のモデルである牧野富太郎氏の業績を顕彰する施設「牧野植物園」の中間に位置しており、高知駅から岡花駅(日高村)はＪＲ四国土佐線により繋がっている。

そこから徒歩10分の場所には村の駅「ひだか」があり、電動自転車が借りられる。山を挟んで北側には仁淀川が流れており、今回選定した錦山公園はその山を越えることを考慮した敷地となっている。

(２)自然・特産

特産物としては茶葉や世界一薄い和紙、トマト等があり、それぞれ霧山茶園としての景観、和紙を利用した工芸品、オムライス街道というグルメスポットへも繋がっている。周辺の自然も仁淀川の他に、高知県最大の湿地地帯、全国的に珍しいドウタンツツジの自生、かつて忍者の修行の場だったとされる猿田洞など実に豊富である。加えて、それらに伴ったレジャーや体験アクティビティも盛んである。土佐二宮として位置付けられた小村神社は1400年以上の歴史を持ち、御神体である国宝をはじめ、重要な文化財も保管されている。このように日高村自身にも多くの魅力があり、中継地点として非常に優秀な場であるといえる。

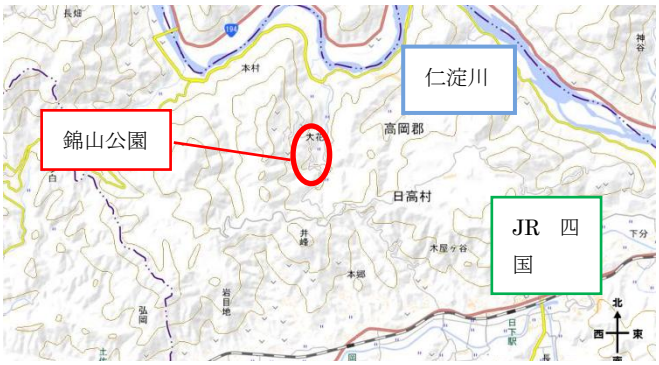

図２　周辺との位置関係

錦山公園周辺には一帯にドウタンツツジが群生しており、これが春には新緑とつぼ状の白い花、秋には鮮やかな紅葉を見せることで、山々が錦を織りなしている。東側には妹背峠という山があり、ここの山道には牧野富太郎に関する植物がいくつも自生している。

(３)地理・気候

錦山公園から仁淀川は見えないが、山頂から仁淀川へ流れる砥石谷川が傍を流れており、その流れの一部は園内にも取り入れられている。このことから仁淀川に向けた中継地点としての物理的かつ感覚的な意味と役割がこの錦山公園にはすでに存在しているように感じる。また、この公園は山と山に挟まれた谷部分に存在しているため、山谷風が吹いている。また、谷ではあるが山の斜面が比較的緩やかで、園内は南北に広いため、山の北側に在りながら日射も確保できる。

図３　選定敷地周辺の地形

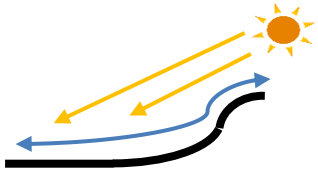

図４　山谷風と日射

4.設計方針

（１）錦山公園とその周辺に存在する自然との繋がりを感じる

錦山公園から意識できる自然との繋がりを人の行動とリンクさせるデザインや計画を行う。

（２）中継地点としての役割を備える

宿泊施設や休憩施設といった観光客が一息つける用途をもつ建築を建てる。

５．設計

（１）空間構成と周辺の自然

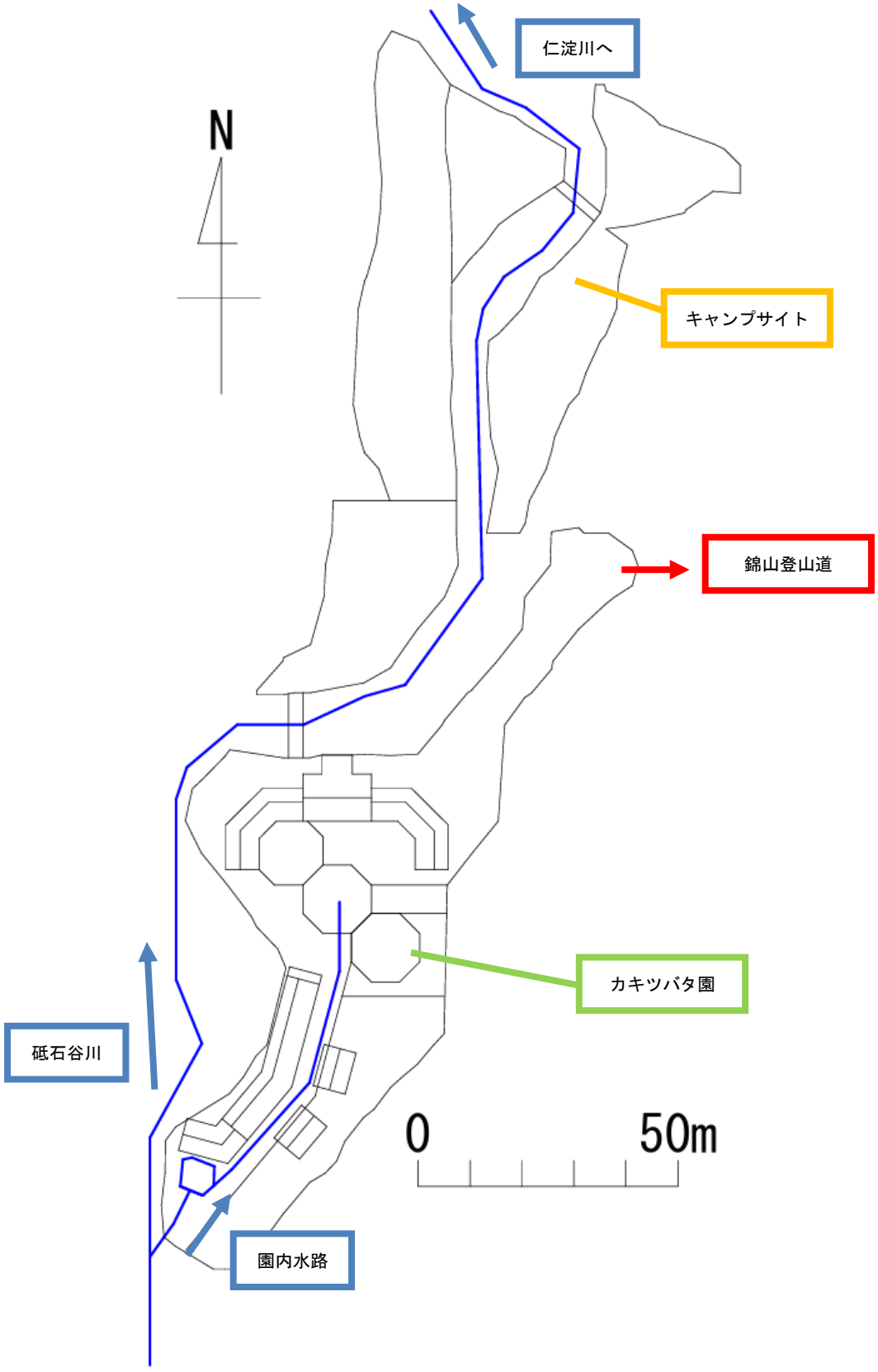

図５　全体の構成と周囲の自然

人の場に対する行動と自然を３つの軸をもとに繋げる。

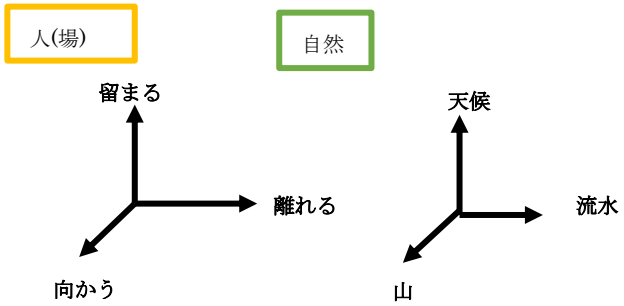

図６　人の行動と自然の軸

１．パッシブシステムの導入

まず、人が場に留まるには、その場が快適でないといけない。それを達成するには太陽や風といった気候を利用することが重要となる。

⓪前提

システム導入部のコンクリート外壁には外断熱を施し、開口部は Low-E ガラスのような断熱性の高い複層ガラスを使用することで外皮性能を向上させる。

夏の強い日差しを屋内にいれないように南面大開口の上部に庇を設けて日射遮蔽をし、極力東西からの日射は遮る。真南でない開口においては袖壁を設けることで東西からの日射は遮りつつ、南側からの日射を取得する。

家全体を通して通風ができるように、南面大開口、北側居室の北側壁面と上階最上部に開口を設ける。

①夏季の Passive Cooling

気温が下がる夜間に積極的に南から北へ吹く山谷風を利用した通風を施し、床、RC 壁、天井面にて蓄冷する。気温があがる日中は窓を閉め、夜間に蓄えた涼しさで公共空間を快適にする。

②冬季の Passive Heating

冬季は南面大開口より、居室の奥深くまで日射取得を行い、床や壁で蓄熱する。蓄熱された熱は輻射され、他の居室へと暖気を導く。

③中間期の通風利用

熱的に快適な春と秋では昼は北から南、夜は南から北への山谷風を取り込んだ通風を積極的に行い、省エネルギーを図る。

④年間を通じた自然採光

南面大開口をはじめとする各部開口からの自然採光により、年間を通して昼光利用する。

これにより日中の電気照明は使用せず、省エネルギーを図る。

図７　夏季の日射遮蔽

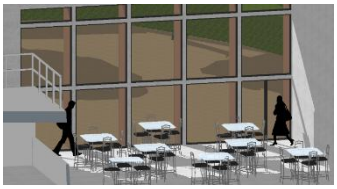

図８　冬季の日射取得

２．自然に向けた軸の内包

次に人が場に向かうには辿り着く場所がどこか方角を知る必要がある。そのためには離れた位置からでも確認できる立体的な自然である山や樹木が必要となる。建築においてはそれらに向けた軸を内包することで自然を意識させる。

図９　妹背峠への軸

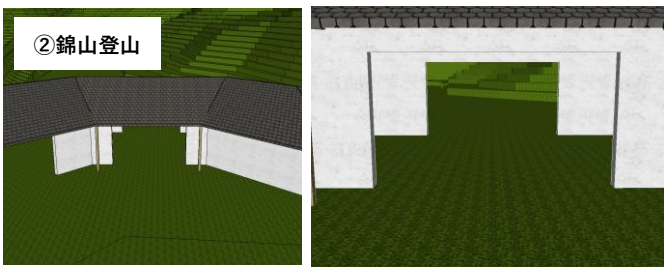

図 10　錦山登山道への道

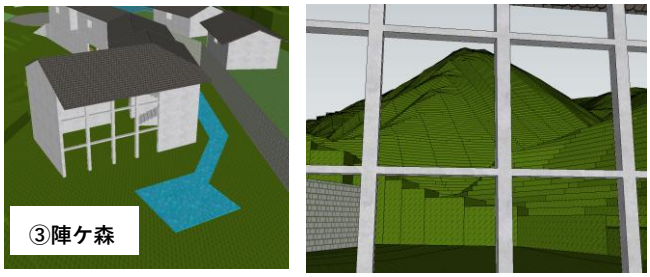

図 11　陣ヶ森への軸

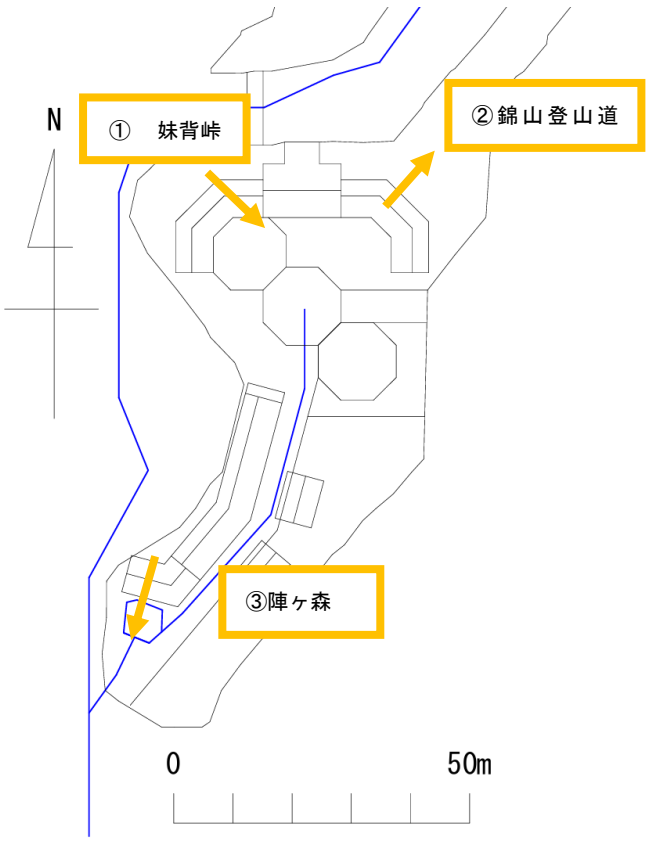

図 12　軸の全体図

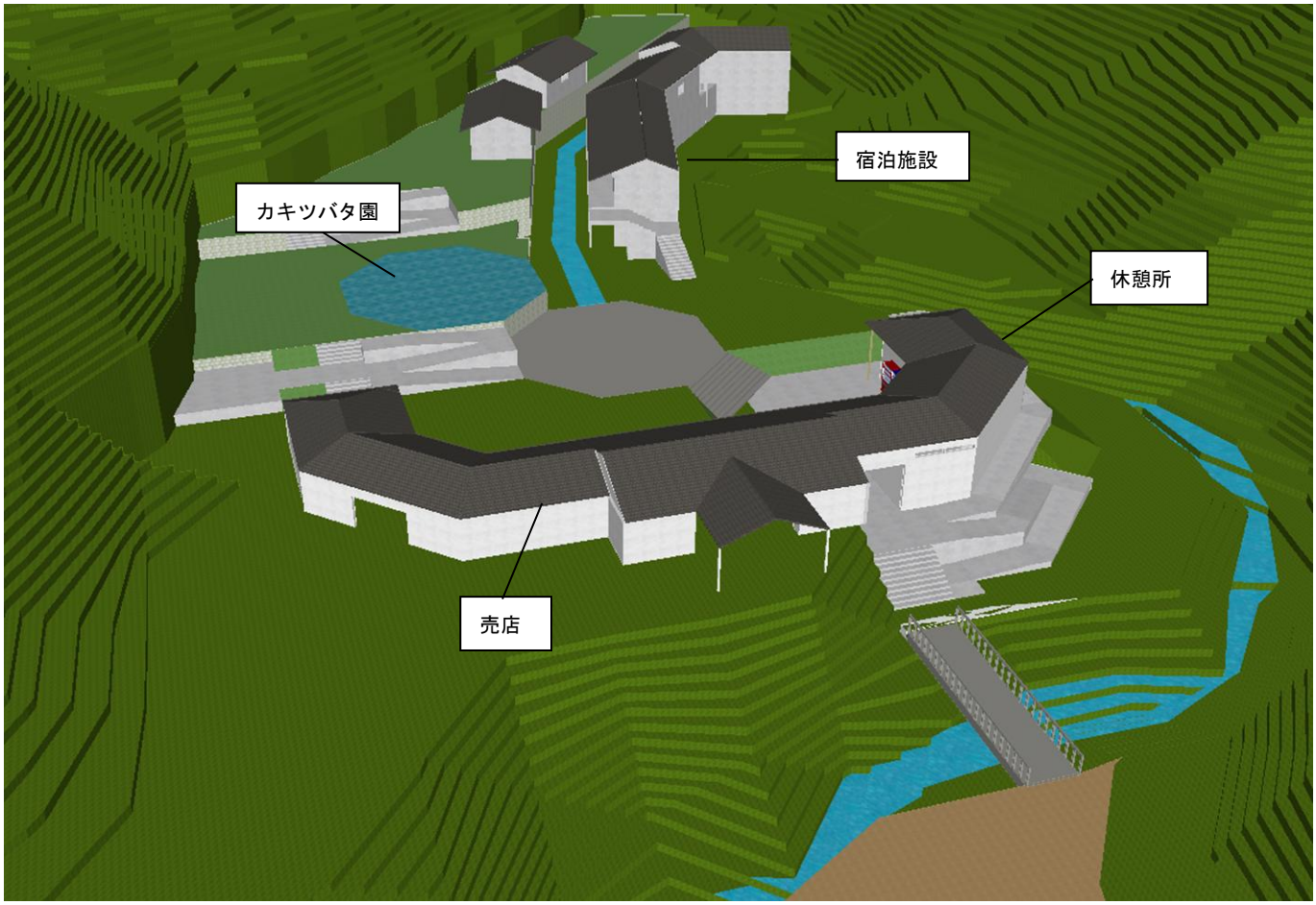

図 13　全体パース

３．水の動線

最後に明確にどこかへ向かうわけでなく、何かを追うことで結果的に場から遠ざかるという行動においても自然と繋がりが持てる。今回の敷地においては、園内を巡る砥石谷川の流れの一部や仁淀川へ注ぐ砥石谷川の流れが対象となり、それら流れを追うことで場から離れ続けることなる。また、その離れるという行動によって、仁淀川や他の建築の軸にも繋がっていくことができる。

４．軸同士の交わり

今回の設計には高知県で多く見られ、小村神社にもみられる出蜻蛉建築形式を取り入れている。出蜻蛉建築形式とは奥の本殿を尾、左右の拝殿を羽根、正面の拝殿を頭と見立て、トンボのような形をした建築様式であり、本設計では先に挙げた、３つの視点場と砥石谷川によって構成されている。

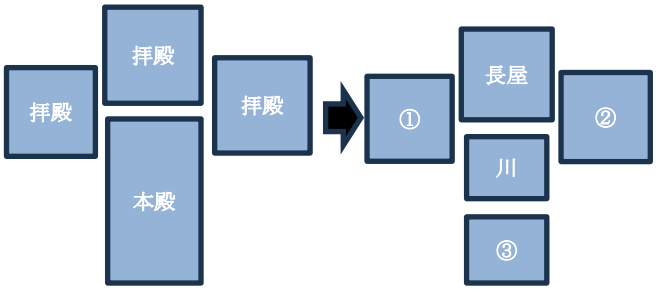

図 14　出蜻蛉形式

（６）その他の計画

１．カキツバタ園

現在荒れ果てているカキツバタ園を再生しつつ、広場との大きな高低差を棚田形式にすることで緩和する。これにより、広場からの視覚的なかかわりが望める。

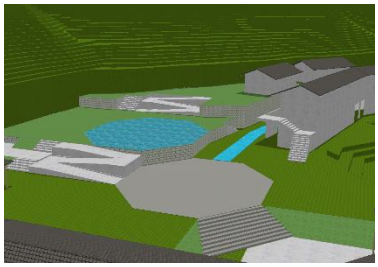

図 15　カキツバタ園

２．駐車場

レンタルサイクルの乗り捨て用に自転車置き場を設置する。

（７）まとめ

今回設計した観光施設が様々な景観へ赴く人たちの中継地点となることで、これまで以上に仁淀川やその周辺の自然、景観に触れやすくなると考えられる。また、現在は閑散とした公園内も自然と人とが交わる空間として、日高村の新たな一景観となり、賑わいも生まれるとも考えられる。

参考文献

令和 5 年県外観光客入込・動態調査報告書
file_2024124317447_1.pdf